

館長だより第6号(2018/2)

天王塚古墳の調査について

平成28年度に特別史跡に追加指定された天王塚古墳について、昨年6月から整備のための基礎的資料入手を目的に発掘調査を実施してきました。このほどその基礎的な調査がほぼ終わりに近づきましたので簡単に報告させていただきます。なお正式な調査の報告については整理作業を終えたのち刊行する予定です。

岩橋千塚古墳群はその分布する地域によっていくつかに分けていますが、とくに前山地区と呼ぶ地域は狭い意味での岩橋千塚といわれるほど古墳が集中している地区です。丘陵の稜線には天王塚、将軍塚、知事塚、郡長塚、大日山35号墳と呼ばれる大型の前方後円墳が並んでおり、これらから北に延びる多くの尾根の稜線に沿って大小さまざまな円墳が分布しています。ところでこれらの名称はいつ頃できたのでしょうか？平成23年11月に出版した紀伊風土記の丘が開館40周年記念写真集『写真で見る紀伊風土記の丘』にその経緯が記載されています。それによると明治40年(1907)頃に岩橋前山頂上部分の大本が倒れ、その下から多くの遺物が見つかりました。海草郡役所に届けたところ九鬼郡長が現場を訪れ、出土遺物を郡役所へ持ち帰りました。このことがあってからその古墳を「郡長塚」(前山B112号墳)、その東にある、より大きい古墳を「知事塚」(前山B67号墳)と名付けたとあります。

これより以前、紀州徳川家を相続した徳川頼倫は、明治39年(1906)に岩橋千塚の実地踏査を行っています。さらに徳川から報告を受けた大学時代の学友で考古学者坪井正五郎は大野雲外を派遣して調査に当たさせます。この大野の報告は、N. G. Munro の『*Prehistoric Japan*』に引用され世界に紹介されました。そこに天王塚と記載されている古墳は、石室の構造と、盗掘穴の特徴から「将軍塚」の間違いであることが1967年に刊行された関西大学による報告で示されています。このように岩橋千塚の代表的な古墳に固有の名称がつけられたのは、おそらく明治40年頃のことと考えられます。

天王塚古墳は、昭和38年に和歌山市教育委員会の委嘱で関西大学によって発掘調査が行われました。その結果、高さ約5.9mの横穴式石室が確認され、その高さは全国2番目の規模であることが明らかになり、当時大いに話題となりました。その後は果樹園開墾を経て樹木や竹が繁茂し、古墳の保存が心配される状況になっていました。和歌山県教育委員会は平成27年7月から当該古墳を特別史跡に追加指定すべく、必要な測量調査や墳丘部の調査を実施しました。調査で設定した各トレンチで墳丘裾が確認され、全長88mの前方後円墳であることがわかりました。墳丘は後円部、前方部の1段目は地山を利用し、テラスと段築2段を構築しています。埴輪や葺石などの外表施設は見られませんが、和歌山県では最大の前方後円墳であることが明らかになりました。

平成29年度には保存整備計画の一環として、墳丘部の調査と内部主体の基礎調査を行いました。内部主体の石室は緑泥片岩を材料として積み上げられた石梁、石棚を伴う特徴的

な岩橋型横穴式石室で、天井の高さや内部の広さは和歌山県下最大級のもので、隣接する府県のものと比較しても決して見劣りしません。

この古墳の存在は当時の紀伊地域の豪族紀氏の繁栄を示すものとしても注目されています。

この古墳の調査成果を皆様に見ていただく会を平成30年3月3日と4日に行いたいと考えております。なお天王塚までの経路が急峻で滑りやすく、その混雑や不測の事態の発生を防ぐために、見学希望の方々にはあらかじめ往復はがきで申し込みをいただき人数調整をさせていただきます。できるだけ多くの方々に、安全を確保しつつ見学していただきたいと考えております。混雑による事故防止のため、ご理解とご協力をお願いいたします。

申し込み方法は当館HPをご参照ください。同時に調査期間中の写真パネルなどを資料館にて展示させていただきます。出土遺物や調査途中の状況を知りたいという方は是非ご覧ください。皆様方のお越しをお待ちいたしております。